

ディアスポラという「ワタン」

ユダヤ系イラク人作家 サミール・ナッカーシュと祖国

天野 優

I. はじめに

本稿で取り上げるサミール・ナッカーシュ (שמיר נקאש/משורר [סמיר] נקאש / Samir Naqqash, 1938–2004) は、イラクのバグダードで生まれたユダヤ人であり、イスラエルで作家となったのもアラビア語で文学作品の執筆を続けた最後のイラク出身ユダヤ人作家として知られている。現在イラクと呼ばれる領域にかつて存在したユダヤ・コミュニティ¹は、一説にはその起源を紀元前6世紀のバビロン捕囚にまで遡るとされ、バビロニア・タルムードの編纂地であったことなどから、ユダヤ世界においても長きにわたり重要視されてきた土地である。また20世紀前半、近代国民国家としての在り様を模索していたイラクにて、それまでの「ユダヤ教徒」アイデンティティの変容に伴い「イラク人」、「アラブ人」としての自覚を高めつつあった一部のユダヤ人は、より世俗的かつ包括的なイラク社会の構築に貢献しようと尽力していた。こうした背景のもと、アラビア語を母語としてイラクに生まれ育ったナッカーシュであるが、予期せぬ移住の後イスラエルを「祖国」とすることを終始拒み続け、「母国」イラクへの帰還を強く望んで別の土地を渡り歩くこととなる。半ば自伝的でもあるその作品にも触れつつ、彼の複雑に入り組んだ生涯の一端を明らかにしたい。

II. サミールとは何者か？

「サミールとは何者か? (סמיר מי?)」これは、2004年ナッカーシュ死去に際しハアレツ紙 (עיתון הארץ) が掲載した記事の見出しである²。サミール・ナッカーシュという人物を我々は、どう形容すべきなのだろうか。また、ナッカーシュ自身は自らをどう形容したのだろうか。イラクに生まれ、その後イスラエルへと移住したユダヤ人の自己認識は多岐にわたる。イラク系ユダヤ人、アラブ系ユダヤ人、ユダヤ系イラク人、ユダヤ系アラブ人、バビロニアのユダヤ人、同じような形容詞の組み合わせでも、その意味するところは用いる者によってそれ

¹ イラクのユダヤコミュニティ一般に関しては以下を参照されたい。 אברהם בן יעקב, יהודי בבל מסוף תקופת. ירושלים: קריית ספר, 1979. 1038-1960. גאונים עד ימינו. Abbas Shiblak. *The Lure of Zion: The Case of the Iraqi Jews*. London: Al Saqi, 1986; Nissim Rejwan. *The Jews of Iraq: 3000 years of History and Culture*. Kentucky: Fons vitae, 2009; Orit Bashkin. *New Babylonians: A History of Jews in Modern Iraq*. California: Stanford University Press, 2012.

² נרי ליבנה. "סמיר מי?". *הארץ*, 3 באוגוסט 2004. (20 באוגוסט 2018: <https://www.haaretz.co.il/misc/1.988723>)

それ僅かに異なる。ヘブライ語で יהודי、アラビア語で يهودي、英語で Jew とされる「ユダヤ人」を「世俗的概念としての民族（ユダヤ人）」とするか「信仰共同体（ユダヤ教徒）」とするのか³、というのは単に翻訳上の問題では済まされない、近代以降のユダヤ教徒が直面し未だ包括的な解決策が見出されていない問いの一つである。2000 年末、比較文学研究者のリタル・レヴィ (Lital Levy) との面会でナッカーシュは「私はユダヤ系アラブ人 (ערבי-יהודי) だ。まずイラクにおいて私はユダヤ系イラク人 (עיראקי-יהודי) だった。そしてここイスラエルでも、ユダヤ系イラク人だ」と述べたという⁴。イラク出身ユダヤ人の文学を専門とするルーベン・スニール (ראובן שניר) が 2001 年にインタビューを行った際も自らを「ユダヤ系アラブ人」と形容していることから、ナッカーシュは自身を何よりもまず「イラク人」、「アラブ人」とであると自負していたようだ⁵。一方で上述のハアレツ紙の記事は、冒頭で彼を紹介する際「イラク系ユダヤ人/教徒 (יהודי עיראקי)」と、「ユダヤ人/教徒」であることに重点を置いた表現を用いている。では、יהודי である彼のことは「ユダヤ人」とすべきなのだろうか、それとも「ユダヤ教徒」とすべきだろうか。同記事は、ナッカーシュが子供たちに宗教的な教育を受けさせたことを記しつつ、彼自身は世俗的 (חילוני) であったと明記する⁶。一方で彼と親しかった人々は「彼は大変ひたむきにユダヤ教に打ち込む、יהודי であった」⁷、「サミールは全身をもって熱心な יהודי であり、バビロニア・ユダヤというルーツを称賛していた。彼が自身のユダヤ性を否定していると感じることは一度もなかった」⁸と話す。祝祭日や宗教的伝統を維持しながらも戒律すべてを守るわけではない、ユダヤ教に対するある意味では両義的なナッカーシュの姿勢は、世俗的な「ユダヤ人」か宗教的な「ユダヤ教徒」に二分化されていく傾向が顕著な現代イスラエルにおいて、どちらにも属さないいわゆる「伝統派 (מסורתי)」であると形容するのが妥当であろう⁹。以上を踏まえ本稿では、暫定的にナッカーシュを「イスラエルにおけるイラク系ユダヤ人」であることを余儀なくされながらも、アラビア語での執筆を通してイスラエル建国前の「ディアスポラのユダヤ系イラク人」として生き続けることを渴望した人物としたい。

ナッカーシュはその生涯において、長編小説、短編小説、演劇を含む 13 冊の本を出版し

³ 白杵陽「イスラエルにおける宗教、国家、そして政治—「誰がユダヤ人か」問題とその法制化をめぐる—」『国際政治』第 121 号、1999 年、95 頁。

⁴ ליבנה, "סמיר מי?"

⁵ ראובן שניר, ערביות, יהדות, ציונות: מאבק היהדות ביצירתם של יהודי עיראק. ירושלים: מכון בן צבי, 2005, עמל 442.

⁶ ליבנה, "סמיר מי?"

⁷ שם.

⁸ שלמה שפירא. היכרותי את סמיר נקאש: דברים שהשמעתי בערב עיון לזכרו של הסופר סמיר נקאש ז"ל ליום שלישי 31.01.2006. בבית "מרכז מורשת יהדות בבל" באור יהודה, ב 19 בפברואר 2015. (<http://israblog.nana10.co.il/blogread.asp?blog=292694&blogcode=13181799>; 20 באוגוסט 2018)

⁹ 「伝統派 (מסורתי)」に関しては以下を参照されたい。Yaacov Yadgar. "Jewish Secularism and Ethno-National Identity in Israel: The Traditionist Critique," *Journal of Contemporary Religion* 26:3 (2011), pp. 467-481.

た。それらの作品は、ヘブライ語聖書に由来するようなユダヤ的な要素を色濃く反映した用語、20世紀初頭のイラク及びユダヤ人の間でのみ使われていた極めて限定的な口語や表現、ナッカーシュ自身の経験、関心に基づく暗喩に満ちた正則アラビア語など、多様な文体を用いて書かれていることで知られている。批評家や研究者、一部のイラク出身ユダヤ系知識人やアラブ諸国の知識人からは常に高い評価を得ながらも、イスラエル国籍のユダヤ人としてユダヤ的題材を用い、バグダードの宗教的多様性を反映した方言を含むアラビア語で書き続けるという極端に特異な立場にあったナッカーシュにとって、読者を獲得することは容易ではなかった。ヘブライ語アラビア語両言語を公用語に指定していたもの実際にはヘブライ語が圧倒的に優位な位置を占める現代イスラエルにおいて¹⁰、彼のアラビア語作品がヘブライ語話者のユダヤ人読者に読まれることは皆無と言っても過言ではない。一方で今日のアラブ世界においては、ユダヤ人であることがイスラエルを連想させシオニストと同一視されてしまうということ、またアラビア語で書かれているとはいえその主題が非常に限定的であることから、アラビア語話者の読者を得ることも同様に困難であった。

III. イラクからイスラエルへ

1948年のイスラエル建国以前、北アフリカから中央アジアにかけてのイスラーム世界には多くのユダヤ・コミュニティが存在した。その一つであるイラクでは、首都のバグダード、次いでバスラやモースルといった主要都市に集中していたユダヤ人口が、20世紀の半ばには12万人に達しようとしていた¹¹。オスマン帝国解体を経てイギリス委任統治が始まった20世紀初頭のイラクでは、緩やかに進む近代化／世俗化の中でユダヤ・コミュニティも一定の経済的繁栄を享受していた。また特に1920年代は、イラク社会において様々なナショナリズム

¹⁰ 2018年7月19日に賛成62反対55で可決された「基本法：ユダヤ民族のための国民国家としてのイスラエル (חוק יסוד: ישראל-מדינת הלאום של העם היהודי)」(通称：国民国家法 (חוק הלאום))は、「ヘブライ語が国家の言語である」とし、アラビア語を「国家において特別な地位を持つ」言語であると規定したため、アラビア語はその公用語としての地位を失った。

(https://fs.knesset.gov.il/20/law/20_lsr_504220.pdf :2018 באוגוסט 20) イスラエルにおいてアラビア語が公用語であった背景には、1922年にパレスチナ枢密院勅令第82条が行政、立法の場での諸通知を伝える公式言語として英語、アラビア語、ヘブライ語を定めたという経緯がある。1948年の建国後は、ほとんど手が加えられないままイスラエルの法体系に組み込まれ、それによって公用語としての地位を保ち続けることとなった。以下の論考では、第82条を取り入れる際英語は公用語とされなかったことから、アラビア語を残すという選択は当時のイスラエルの法律制定者たちの意識的な決定であったとする。Ilan Saban and Muhammad Amara. "The Status of Arabic in Israel: Reflections on the Power of Law to Produce Social Change," *Israel Law Review* 36:2 (2002), pp. 10-13.

¹¹ 1947年の国勢調査に基づくイラクの公式統計は、イラクのユダヤ人口が、全人口4,500,000人の2.6%である約118,000人に達していたとするが実際はそれ以上であったとする研究もある。Abraham Ben-Yaacob and Hayyim J. Cohen/ Nissim Kazzaz (2nd ed.). "Iraq," *Encyclopaedia Judaica*. 2nd Edition. Michigan: Thomson Gale, 2007, vol. 10, p. 16; Peter Wien, *Iraqi Arab Nationalism: Authoritarian, Totalitarian and Pro-Fascist Inclinations, 1932-1941*. London: Routledge, 2006, p. 43.

の萌芽が見られた時期である。イラク社会におけるナショナリズムの興隆に伴って、少数ではあるものの「イラク人」や「アラブ人」といった帰属意識を持つユダヤ人が現れるのもこの頃であったが、1930年代に入るとそうした包括的な社会への展望は陰りを見せ、イラク社会におけるユダヤ人の立場に影響が見られ始める。1940年代に入ると第二次世界大戦における列強の対立がイラクにも波及し、独立後も続くイギリスの介入に対する不信感と極端なアラブ民族主義の隆盛が相まって親ナチス的な政権が発足するなど、国内の緊張が高まった。こうした状況の下、権力の空白期間となった1941年6月、ユダヤ人を狙った殺戮、暴行、強奪を伴う迫害事件がバグダードで起きた。ファルフード (Farhud/الفرهود/הפרוד) と呼ばれるこの事件は、政治とは距離を置く姿勢を数世紀にわたって重んじてきたユダヤ・コミュニティがより直接的な政治的意思を表明する動機を与えた出来事とされている。ファルフード以降に見られる動きとして具体的には、イラクにおける平等な社会の実現を掲げ若い世代に対して求心力を発揮し多くのユダヤ人を惹きつけた共産主義活動、イラクを見限りイスラエルへの移住を推進したシオニスト運動、そして限られた少数の知識人らによって共有されていたイラク愛国主義という、これら三つの潮流を挙げることができよう。

1948年のイスラエル建国以降、アラブ世界において「ユダヤ人/教徒」と「シオニスト」との境界が曖昧になるにつれ、イラク国内におけるユダヤ人への風当たりが強くなり、最終的に1950年から1951年の間にイラクのユダヤ人口のほとんどがイスラエルへと移住することとなる¹²。彼らの多くは、宗教生活における聖書ヘブライ語との接触を除き日常的に使用する言語としての現代ヘブライ語の知識がほとんど無いままイスラエルへとやって来た。それゆえ自由に操ることのできないヘブライ語と、敵性語とみなされたかつての母語であるアラビア語を前に焦燥感を募らせた。イラク出身ユダヤ人作家の間では、執筆言語の選択という問題が生じた。各世代が出した答えは様々であった。最も多様な選択が見受けられるのは、移住当時10代から20代であった作家らである。サミー・ミハエル (סמי מיכאל/سامي ميخائيل/Sami Michael, 1926-) やシモン・バラス (שמעון בלס/שמעון בלס/Shimon Ballas, 1930-) はアラビア語からヘブライ語での執筆へと移行し、彼らより若いエリ・アミール (אלי עמיר/Eli Amir, 1937-) はデビュー当初より一貫してヘブライ語で執筆している。一方、こうした傾向に対して敢えてアラビア語で執筆を続けた作家が二人いる。本稿で扱うナッカーシュとイツハク・バル=モシエ (יצחק בר-משה/إسحاق بار-موشيه/Yitzhak Bar-Moshe, 1927-2003) である。両者とも、イスラエル移住後にアラビア語による文学作品執筆を始めた。なおアンワル・シャール (أنور شاول/انوار شاول/Anwar Shaul, 1904-1984) に代表されるような、20世紀前イラクのアラビア語文壇において既に立場を築いていた世代は、年齢的な理由から執筆言語と

¹² ユダヤ人口は1940年代後半には135,000人に達していたが、1948年から1951年にかけて123,500人がイスラエルへ移民し、約6,000人がイラクに留まったという。Abraham Ben-Yaacob and Hayyim J. Cohen/ Nissim Kazzaz (2nd ed.), "Iraq," p.16.

してのヘブライ語を母語であるアラビア語と同じ水準まで高めることができなかつたため、次第に文学作品を書くことから距離を置く例がほとんどであった。

上に挙げた作家の中で、ナッカーシュは最年少である。イラクでアラビア語の書き手として経験を積んだ世代が新しい言語であるヘブライ語での執筆を諦めたことは理解できるが、1951年の移住時に弱冠13歳であり、ヘブライ語を吸収し同化を遂げる余地が十分あったであろうナッカーシュが、アラビア語で書き続けた最後の作家となったのは何故なのだろうか。以下では、アラビア語作家としてのナッカーシュの方向性を決定づけた、イスラエルへの移住とそこからの逃避という二つの要素に焦点を当てたい。

IV. アリヤー¹³、破綻の始まり

1951年、家族と共にイスラエルへと移り住んだ13歳のナッカーシュは最初の数年間を、建国もないイスラエルにやって来た移民たちが一時的に滞在するトランジット・キャンプ「マアバラ (מעברה)」で過ごすこととなる。一家はまずハイファ近郊のシャアル・ハ・アリヤー (שער העלייה) というマアバラのテントで2ヶ月を過ごした後、現在ペタフ・ティクヴァ (פתח תקוה) の一居住区となっている別のマアバラ、アミシャヴ (עמישב) へ移り、半年のテント生活を経て、アパートが建設されるまでの8年間、簡易住居で暮らし続けたという¹⁴。

1950年代初頭、建国直後のイスラエルはかつてない量の移民流入に直面していた。一般に「大量移民 (העלייה ההמונית)」と呼ばれるこの時期の移住現象は主にホロコースト生存者であるヨーロッパ出身のユダヤ人と、イラクをはじめとするアラブ諸国出身のユダヤ人で構成されており、彼らを収容することを目的としてイスラエル全土に設置されたのがマアバラであった。こうした一時的な収容施設におけるイラク出身のユダヤ人は、1953年の時点で全体の35.7%であり、国別の移民数としては最も高い比率を占めていた¹⁵。

新たな移民の波に対応するため急遽設置されたマアバラでは、環境や設備における不十分さが際立っていた。電気や水の供給もままならない非衛生的な環境下で数か月から数年にわたる生活を強いられたイラク出身ユダヤ人の中には、イスラエルでの新たな生活に落胆を覚える者も少なくなかった。またこうした環境面での過酷さに加え、ことアラブ諸国出身のユダヤ人に関して言えば、イスラエル社会への同化過程において自尊心を傷つけられたことも、後に疎外感を助長する要因となる。建国以前よりヨーロッパ出身のユダヤ人が支配的であったイスラエル社会に順応するために、障壁となるアラブ的な伝統や文化、そして母語である

¹³ アリヤー (עליה) とは、動詞 עלה (上がる、登る) から派生した語で、イスラエルへの「帰還」を意味する。

¹⁴ ליבנה, "סמור מיל?",

¹⁵ מרים קצ'נסקי, "המעברות". עולים ומעברות, 1952-1948: מקורות, סיכומים, פרשיות נבחרות וחומר עזר. ירושלים: יד יצחק בן-צבי, 1986, עמ' 75.

アラビア語を押し隠すようになったイラク出身ユダヤ人にとってマアバラとは、イラクからイスラエルへという地理的な変遷における通過点であっただけではなく、自身のアイデンティティーが疑問に付され、時には望まない変容を要求される場でもあったのである。

ナッカーシュはインタビューにおいて「3階建ての宮殿生活から、ええと、その後の話は察しが付くでしょう。わたしたちは自分たちがテントにいることに気付いたのです。こうして、わたしにとっての、そして家族にとってのトラウマが始まりました」と語っている¹⁶。この回答に続くナッカーシュの言葉を追うと、彼の言うこのトラウマには、父親の死が大きく関わっていることがわかる。

しかし不幸なことに、わたしたちがやって来た年の天候は極めて過酷でした。その年の冬は14日間雨が降りやまず、軍がやってきて子供らを連れていくという出来事があり、またテントが飛ばされてしまうということがありました。これらすべてが父に大いに影響を及ぼして、2年のうちに発作が起り死んでしまったのです。わたしはその時14歳でしたが、これはとてつもない打撃でした。なぜなら父は真にわたしの模範であったからです。しかしこのトラウマが、書きたいというこの欲望に火を点け、わたしはたくさん書くということを始めました。¹⁷

同じインタビューにてナッカーシュは、13歳に至るまでの年月は彼の記憶において実に堅固なものであると語り、両親の職業や育った環境、当時彼に個人的な影響を与えた大きな政治変動などによって、自分は早い時期に成熟したのだと回想し述べている¹⁸。こうしたことから、マアバラにおける父の死は、執筆への強い動機をナッカーシュに与えたと同時に、子供時代に突然の終止符を打ったともとれる。

前章で触れた、サミー・ミハエルやシモン・バラスに代表されるようなアラビア語からヘブライ語へと執筆言語を切り替えたイラク出身の作家らが、ヘブライ語で小説を書くにあたって初めに題材として選んだのが、このマアバラでの生活であった。1960年代後半に初出し、今日「マアバラ文学 (ספרות המעברה)」という名称で現代ヘブライ文学の下位ジャンルとして論じられることもあるこれらの作品群は、ヨーロッパ出身ユダヤ人作家らが主流であった現代イスラエルの文壇に新たな声を持ち込んだ最初の例とされている¹⁹。

¹⁶ Ammiel Alcalay. *Keys to the Garden: New Israeli Writing*. San Francisco: City Lights Books, 1996, p. 102.

¹⁷ *Ibid.*

¹⁸ *Ibid.*

¹⁹ ベルグは、マアバラ文学を「主としてイラクに出自を持つイスラエル人によって書かれる、新移民の期待と彼らが受けた歓迎の不十分さ、一時収容施設の荒涼とした物理的境遇と出身国での生活、といった鮮明な対比や、新移民の文化と古参の住人との衝突などによって、しばしば特徴づけられる」とする。Nancy E. Berg. *Exile from Exile: Israeli Writers from Iraq*. New York: New York State University

執筆言語はアラビア語であるが、ナッカーシュも同じくマアバラを舞台とした作品を執筆している。『タンタル (طنطل، 1978 年)』は、バグダードのユダヤ地区からイスラエルへの移住、そしてマアバラへ、という転換点を描く際、民話的要素を取り入れた短編小説である²⁰。1946 年のバグダード、1950 年代初頭のマアバラ、1970 年のマアバラ跡地、それぞれで起こる主人公とタンタルという霊的存在との遭遇を介して、イラク出身ユダヤ人らが辿るイスラエル社会への同化の過程とその葛藤を象徴的に描いている。霊的存在や怪奇現象の話を書くのが好きであった幼い主人公は、1946 年バグダードで優れた語り手であった祖母から、人間を誑かす、変幻自在であるというタンタルの話を目にし、強く魅了される²¹。その後 1950 年代前半、移住先のイスラエルで主人公は、マアバラにもタンタルが出たという話を聞く。そのマアバラでは、イラク出身ユダヤ人らによるタンタルの目撃証言が相次ぎ、人々はタンタルはバグダードからイスラエルへと一緒に付いてきたのだと怯え、イスラエルに来て弱くなってしまった自分たちでは到底タンタルには敵わないと嘆いていた。さらに時は過ぎ 1970 年、家々が建ち並ぶかつてのマアバラ跡にやってきた主人公は、マアバラ生まれの男の子が「タンタルなど存在しない」と話すのを耳にし、そういえば自分自身はまだタンタルに遭遇したことがないということを感じ出す。

「我々が何をしようと、タンタルだけが確かなことなんだ。その他はすべて幻想だ、」
友人は尋ねた。

「でも君自身、タンタルを見たことがないと認めているじゃないか」

わたしは嘆き、強い悲しみと悔いをもって言った。

「もしかして一生自分の目で見ることはないかもしれない、でもタンタルを感じ、共に
生き始めたんだ。」

「君、大丈夫か、」

「狂気がか？」

「いいや、むしろその妄想さ。」²²

上述のような会話のあと海へ向かい、引き寄せられるままに水中へ進み入った主人公は、波

Press, 1996, p. 67.

²⁰ سمير نقاش، "طنطل"، أنا وهؤلاء والفصام: مجموعة قصص عراقية، تل أبيب: جمعية تشجيع الأبحاث والاداب والفنون، 1978، ص 67-90.

²¹ ナッカーシュ自身の註によると、タンタルは人間をからかうことが好きで、危害を加えることはないが、誑かすことを好む。ある時は羊、ある時は猫、ある時は貨幣、ある時は糸、とあらゆる姿形で見られ、そのいたずらは笑いをもたらす。タンタルは多くの人に見られてきた。"طنطل"، ص 70. またイラク南部に多いマンダ教徒の伝承を扱う以下の文献では、タンタルは一種のポルターガイストのようなもので、通常背の高い形状をしていると述べている。Drower, E. S. *The Mandaean of Iraq and Iran: Their Cults, Customs, Magica Legends, and Folklore*. Oxford: The Clarendon Press, 1937, p. 348.

²² نقاش، "طنطل"، ص 88.

に揉まれる中、突然不安に駆られ助けを求める。すると、大きな笑みを浮かべた色黒の巨人が手を差し伸べてきた。「お前は何者なんだ？」と尋ねる主人公を前に巨人は姿を消し、残された主人公が「タンタルだ、タンタルを見た、タンタルを見た、ル、ル、ル!、」と力の限り叫び、その反響が弱々しく聞こえる場面で物語は終わる²³。

ナンシー・E・バーグ (Nancy E. Berg) は、ナッカーシュを論じる章の冒頭で「過去は単に人々や出来事ではない、子供時代でもある」という彼の言葉を引用し、次のように続ける。

家 (home) とはなんであろうか？とりわけ、亡命者 (exile) にとって、家は特定の時間と場所——自身の母国 (motherland) における子供時代——にある。家 (home) とは、育った家屋 (house) であり、その家庭 (household) の構成員であり、その家庭の異なる日課であり、習慣であり、伝統である。家 (home) は、アイデンティティ、歴史、帰属の感覚を与える役割を果たす。亡命状態は、これらの感覚を失わせ、またそれを取り戻そうという努力へと導く。作家はしばしば、執筆を通してそれを試みる。²⁴

捉えどころのない存在に魅入られた主人公が、なんとかその実態を把握しようと手を伸ばし続けるも、結局は残響ばかりがこだまするという最後の場面は、書き手であるナッカーシュ自身と、彼の過去、子供時代、そしてそれらが存在した「motherland/ワタン」イラクとの関係性を彷彿とさせる。かつてのマアバラは住宅地となり、新しい世代がタンタルの存在を否定しはじめ周囲が緩やかに新しい環境へと適応していく中、主人公とイラクの間には未だ断ち切れない繋がりがあつた。それがタンタルという旧世界の象徴のような霊的存在との対峙を通して浮き彫りになる様は、イスラエル社会への同化過程でナッカーシュが感じていた葛藤を如実に反映しているともとれよう。イスラエルへの移住、マアバラでの生活を経ても克服されなかった違和感を抱えた彼が取った行動は、イスラエルからの逃避であった。

V. 逃避、仮初めのディアスポラ状態

移住後の落胆に追い打ちをかけるような父の死の後、ナッカーシュは15歳にして、イスラエルからの脱走を試みる。イスラエルを離れるというのは、そもそも彼の父が生前計画していたことでもあった²⁵。レバノンとの国境を越えロンドンへと向かうことが目的だったというナッカーシュといふことは、国境を越えることに成功したもののレバノン側の警察に捕らえられ、イスラエルへ送還された。この件は失敗に終わったが、イスラエルから逃避するという試みは、その後、彼の生涯を通じて続くこととなる。

²³ نقاش، "طنطل"، ص ٩٠.

²⁴ Berg, *Exile from Exile*, p. 107.

²⁵ Alcalay, *Keys to the Garden*, p. 102.

1958年、イラクに残してきた財産を取り戻そうと叔母と共にイスラエルを離れたナッカーシュは、トルコを経由してイランへ行き着き、1962年までを主にテヘランで過ごす。その間、インドにも1年ほど滞在したといい、ペルシア語と、いくばくかのヒンディー語を身につけたという²⁶。どうしてイランからイスラエルへと戻って来たのか、イラクへ帰ろうとは試みなかったのかと尋ねられたナッカーシュは、実際のところ良き友人がイラクへ帰れるよう力添えを申し出てくれたのだと前置きをしたあと、イスラエルにいた家族、特に母親の存在が、イランに滞在し続けることやイラクへ帰還することを思いとどまらせたのだと述べる²⁷。

こうした彼のイスラエルから逃避するという試みのうち、もっとも不成功に終わったのが、エジプトへの移住であろう。1980年代より数度にわたりエジプトを訪れ、ノーベル文学賞受賞作家ナギーブ・マフフーズ(2006-1911, نجيب محفوظ)を始めとする知識人らと親交を深めていたことが彼の背中を押し、1991年、ナッカーシュは妻子を伴いエジプトへ移住するが、ごく短期間で再びイスラエルへ帰ることとなる。ナッカーシュの良き友であり師でもあった、同じくイラク出身のユダヤ人でアラブ文学研究者としてヘブライ大学で教鞭を取ったシュモエル・モレの「3ヶ月後、一家全員がここ(訳者註:イスラエル)へ戻ってきた。なぜなら、エジプト人たちが彼を殺しかけたからだ」との言葉からは、アラブ世界もまた、ナッカーシュにとっては安住の地たりえなかったことがうかがえる²⁸。

その後1998年頃、ナッカーシュはイギリスに渡る。中東関係の授業を担当させてくれる大学を探したが採用されることはなく、最終的には亡命イラク人によるイラク国民会議(المؤتمر العراقي/ The Iraqi National Congress)から仕事をもらうことで何とか生計を立てた。しかし2003年のフセイン政権崩壊を受け、英国の亡命イラク人らがイラクへ帰還したことにより収入を断たれ、最終的にまたイスラエルへと帰らざるをえなくなる。

1995年に刊行されたナッカーシュの短編「呪われた町における狂人の預言(نبوءات رجل مجنون في مدينة ملعونة, 1995年)」は、特定の場所からの逃避が主題とされた作品である²⁹。「呪われた」架空の町を舞台としたこの短編小説は、異様な光景や不条理を前に正気を失う主人公の男が、絶え間ない「見よ」という神からの呼びかけに対し、抗うことなく「はい、ここに(هائنا)」と答え続ける様子が描かれる。この作品においては主から与えられる啓示的な言葉に従い続けた結果、男が狂気の淵に追い込まれる過程が軸となり、ヘブライ語聖書由来のモチーフがふんだんに見受けられる。

作中繰り返し使われる「はい、ここに」という応答であるが、これは創世記第22章で、ひとり子イサクを捧げるよう言い渡されるアブラハムが、初めて神から呼びかけられる際に

²⁶ Alcalay, *Ibid.*, p. 104.

²⁷ Alcalay, *Ibid.*

²⁸ ליבנה, "סמור מיל?"

²⁹ سمير نقاش. "نبوءات رجل مجنون في مدينة ملعونة," *نبوءات رجل مجنون في مدينة ملعونة: مجموعة قصصية*. اورشليم القدس: رابطة الجامعيين اليهود النازحين من العراق, 1995, ص 124-127.

発する応答「はい、ここに (הינה)」の訳語としてアラビア語の聖書で使われている言葉である。一般に「アケダー (אקדה)」と呼ばれるこの聖書箇所において、アブラハムの「はい、ここに」には、その呼びかけを発する者、つまり主への服従の姿勢が表れていると理解されている。

本作品の終盤、錯乱する男に対して神は一方的に「逃げよ (اهرب)」という言葉をかけ続ける。預言者を土地から土地へと移動させる神の言葉としてヘブライ語聖書で最も大きな意味を持つのは、ハランの地にいたアブラムに約束の地を示す際神が口にする「行け (אנהב/אנהב)」であろう。神の「逃げろ」という言葉に対して、どうすればいいのか見当もつかない男は、以下のように神に問いかける。

神は狂人のように叫び声をあげた。

「なんということだ、お前もわたしと争うというのか？今すぐ逃げよ」

わたしは四肢の震え、がちがちいう歯、そして体内の痛みと困惑、狂気に抗っていた。

「どうやって？」

主が吠えるのを聞いた。

「逃げよ！」

「でも言ってください、どうやって、そしてどこへ?!」

ほとんど抑制を失ってぼんやりとしたわたしの意識には、主の声だけが届いていた。

「逃げよ!、、、逃げよ!、、、逃げよ!、、、」³⁰

「行け」と命じ、行くべき先へと導く創世記の神に対して、この作品で「逃げよ」と命じる神は男の必死の問いかけにもかかわらず沈黙を貫く。

約束の土地にありながら民は罪を犯し続け、神との関係を修復しようとする預言者は正気を失い、逃げろと言われてもどこに逃げるべきなのかもわからない、父祖アブラハムと神との関係を基軸に描かれるある種の捻じれと加速する混乱は、他の土地を求めながらも、最終的に帰り着くべき場所はどこなのかという問いに明確な答えをもつことができず、繰り返しイスラエルへ戻らざるをえなかったナッカーシュの逃避にも重なる。

イラクの目と鼻の先にあるイラン、かつてバグダード出身のイラク人がコミュニティを形成していたインド、アラブ文化の中心地エジプト、多くのイラク出身亡命知識人を擁するイギリス、ナッカーシュの逃避の軌跡を辿ると、彼は意識的にイラク／イラク人との緩やかな繋がりを保つことができる土地を選んでいたと言えるだろう。ナッカーシュは、自身が作家としてイスラエルでは受け入れられていないということに憤りを示しつつ「わたしは、イスラエルよりもアラブ諸国や海外で、より有名なのです。イタリア、アメリカ、イギリス、そしてイラク、エジプト、パレスチナ西岸地区を含むアラブ諸国で、わたしの本に関する博士

³⁰ نقل، "تبوءات رجل مجنون"، ص ٢٧.

論文が書かれています」と、イスラエル国外での評価の高さを自負していた³¹。確かに「ナッカーシュは最も偉大な、アラビア語で書く作家の一人だ」というマフフーズによる賛辞に代表されるように、ナッカーシュは「一時的ディアスポラ状態」において、より多くの評価を得ることができたのかもしれない³²。しかしこうした一部の評価は必ずしも彼が作家として経済的に自立する一助とはならなかった。友人らの証言からは、彼が常に経済的に問題を抱えていたことが垣間見える。イギリスを去った理由も、収入が途絶えたことでイスラエルの社会保障に頼らざるをえなくなったからである³³。このように一時的なディアスポラ状態は、かつてイラクに存在したディアスポラ状態のものには決してなりえず、また彼のユダヤ人としての身の安全や作家としての経済基盤を与える場所でもなかった。

ナッカーシュはシオニズムを、人種差別的な運動でミズラヒーム (מזרחים) ³⁴を排斥するものであるとし、イスラエルを、アシュケナジームによって構成される支配層に所属しない者、もしくはそれを支持しない者を見捨てる国家であると述べていた³⁵。しかしそうした、イスラエルやシオニズム、ヘブライ語に対するナッカーシュの感情は、必ずしも一貫したものではなかったようだ。例えば、ナッカーシュの文学的才能をいち早く見抜き、書籍が出版される度に序文を書くなどしてその執筆活動を支援していたモレは、しばしばシオニストの歴史叙述へ同調するような言説を展開しているとされる人物である³⁶。スニールは、ナッカーシュの言動に見られる一貫性の無さを以下のように指摘している。

イスラエル国家が建国されたとき、ナッカーシュは民族的誇りで満たされたという。しかしこの感情は、イスラエルにやって来た後、勢いよく打ち砕かれる。彼の家族を悩ま

³¹ Alcalay, *Keys to the Garden*, p. 100.

³² אפרת שלום, "לא שייך לשום מקום", *הארץ*, 15 ביולי 2004.

³³ ליבנה, "סמיר מי?",

³⁴ 東洋を意味する「ミズラヒーム (מזרחי)」の複数形であり、主に中東イスラーム世界出身のユダヤ人を指す際に用いられる。なおスニールは、イスラエル建国前のパレスチナにおけるユダヤ・コミュニティは、アシュケナジーム (אשכנזים)、ドイツ人、すなわちヨーロッパ出身のユダヤ人)、スファラディーム (ספרדים)、スペイン人、すなわち 1492 年にスペインを追放されたユダヤ人の子孫で、中東に定住し他の東洋のユダヤ・コミュニティに溶け込んだ者)、ミスタアレヴィーム (מסתערבים)、「アラブ化された者」、つまりアラブの生活様式を取り入れアラビア語を話す、パレスチナの地に住み続けていた土着のユダヤ人)、エドート・ハミズラハ (עדות המזרח)、「東洋のコミュニティ」、つまりアラブ・ムスリム諸国から移住してきたユダヤ人)によって構成されていたにも拘わらず、建国後はこれらの集団間における少なからぬ相違が曖昧にされ、アシュケナジーム/非アシュケナジームという二極への分化が進んでいく中で後者に分類された上で、「ミズラヒーム」と呼ばれるようになったと指摘する。Reuven Snir. *Who Needs Arab-Jewish Identity?: Interpellation, Exclusion, and Inessential Solidarities*. Leiden: Brill, 2015, p. 132.

³⁵ ליבנה, "סמיר מי?",

³⁶ Yehouda Shenhav. *The Arab Jews: A Postcolonial Reading of Nationalism, Religion, and Ethnicity*. California: Stanford University Press, 2006, p. 140.

せた経済的、社会的困難が原因である。³⁷

またヘブライ語で執筆しない理由に関しても、試みたものの成功しなかったと答える場合もあれば、ヘブライ語で書くことを拒んでいる、と述べることもあった³⁸。

ナッカーシュと執筆言語の問題を掘り下げることが、一見矛盾する彼の生涯の核心に迫る手がかりとなるかもしれない。ナッカーシュの文学作品が世に出たのは、シオニスト左派政党マパムが発行していたアラビア語の機関誌『見張り (المركز)』に、1958年に掲載されたのが最初である³⁹。書籍として出版が実現するのは1971年で、その後ナッカーシュの作品のほとんどは自費出版か、エルサレムに本部を構えていたイラク出身ユダヤ系知識人協会 (رابطة الجامعيين اليهود النازحين العراق في اسرائيل) を通じて出版されている。このことから、彼の作品は商業的成功からは程遠かったと言えよう。「アラビア語で書くユダヤ人は、あらゆる問題を皆の前に示すことになるが、それでもわたしはただ単に自分自身の言葉で書いていたい」と述べ、自身の作家としての在り方自体が問題提起の契機となることには自覚的であり、しかし同時に「特定の問題や特定のテーマをゴールとしている、主義に傾倒している著述には反対だ」⁴⁰とし、具体的な例として「ユダヤ人は、一般に「ユダヤ人の問題」について書く。同じことはパレスチナ人の著述でも起こる。多くの作家はパレスチナ人の「問題」についてのみ書く」⁴¹とし、あくまで「文学というものは普遍的、いやさらに正確に言えば、個人的なものでなければならぬ」⁴²との見方を示していた。たとえ難解になり、読者が減るとしても自分自身の言葉で書くという点にこだわりをもちながら、翻訳を通してより多くの反応を得ることに興味があったようで、以下のように語っている。

今のところ、英語やフランス語に翻訳されることにより興味がある。なぜなら、その時になって初めて、わたしは自分自身を正しく評価できるだろうから。言語がそれ自体自らの価値を知ることは大変難しい。言語の価値というのは、読者や批評家からの反応を通してこそ、実現されるのだ。わたしについて博士論文を書く学生がいるのは本当だ、

³⁷ שניר, ערביות, יהדות, ציונות, עמל 202.

³⁸ 1993年のインタビューでは不成功の理由として、「ヘブライ語で書くための、わたしの知識不足だ。わたしにとって、アラビア語はメッセージを伝えるための最も強い道具だ。アラビア語は、ヘブライ語に見出すことが困難な表現を持つ、より豊かな言語だ」と話している。"לא שידך לשום מקום." שלום, 一方スニールは、ナッカーシュが「ヘブライ語で書くことを拒否した」と述べているインタビューを引用している。202. עמל 202. שניר, ערביות, יהדות, ציונות, עמל 202. なお、上述のハアレツの記事は、ナッカーシュはヘブライ語で執筆すべきだとマフフーズが考えていたとも伝えている。

³⁹ Geula Elimelekh. "Samir Naqqash: Between the Sacred and the Demonic." *Studia Orientalia Electronica* 3 (2015), p. 3.

⁴⁰ Alcalay, *Keys to the Garden*, p. 105.

⁴¹ *Ibid.*

⁴² *Ibid.*

でもわたしは「アカデミックな」作家や好奇の的でありつづけたくはない。わたしの本を読んでほしい。そうすればより普遍的な意味で、わたしをあまり知らない読者からの反応を得ることができるからだ。⁴³

こうした言葉に反映されているように、難解な作品を書きながら、ナッカーシュ自身はあくまで一般の読者に自らの作品が読まれることを望んでいたのだった。

アラビア語を選んだということだけが彼の孤立の原因ではない。イラク出身でイスラエルへ移住したアラビア語母語話者らの間で、ナッカーシュが愛読されているかということ、そうとも限らない。例えば、同じくイラク出身でアラビア語で執筆を続けたバル＝モシェはナッカーシュの作品を評して、読解のために読者に要求する努力ゆえに「読めない (unreadable)」「楽しめない (not enjoyable)」ものであると表現し、「それらの単語は知っているのだが、それが使われている文脈を知っていると本当に苦痛だ、どうして彼はここでこの単語を使うのだ、なぜ？」と述べている⁴⁴。また、かつてイラクでアラビア語短編小説の書き手として一定の評価を得ていたシャローム・ダルウィーシュ (שלום דרוויש / شالوم درويش / Shalom Darwish, 1913-1997) は、ナッカーシュの作品を読もうとしたが一度も成功したことはないということを確認している⁴⁵。

前に述べたように、ナッカーシュとバル＝モシェは、イスラエルに移住後アラビア語で執筆するという選択をした最後の作家である。一見動機や背景を共有していると思わしき両者であるが、アラビア語の文体へのアプローチにおいては大きく異なる。ベルグによると、バル＝モシェは、自身の作品内において熟語などをより新聞・雑誌で使われる文体に近い形へと簡略化したが、ナッカーシュは、アラビア語という言語の複雑さを、凝縮された引用文献満載の物語に、さらに多層的な意味を付け加えるという目的のために利用したという⁴⁶。ベルグは続けて、ナッカーシュのそうした言語の素養は極端な方向へと走りすぎ、結果的にコミュニケーションの失敗へ至っていると述べる⁴⁷。こうした両者の差は、イスラエル国家との関係性にも表れていると考えられる。ナッカーシュは、一時的に国营ラジオ・テレビ放送局、イスラエル放送局 (קול ישראל) のアラビア語部局で働いたことがあったそうだが、その後は主にアラビア語とヘブライ語の翻訳を通して得る収入を主な生活の糧としていた。一方、バル＝モシェは、イスラエルの政策を国内外のアラビア語話者に説明するという役割を担い、カイロのイスラエル大使館に勤務するなど、体制と密接な関係を築いていた⁴⁸。

⁴³ Alcalay, *Keys to the Garden*, p. 111.

⁴⁴ Berg, *Exile from Exile*, p. 55.

⁴⁵ Berg, *Ibid.*

⁴⁶ Berg, *Ibid.*, p. 152.

⁴⁷ Berg, *Ibid.*

⁴⁸ שניר, ערבייות, יהדות, ציונות. עמל 189.

VI. マアバラと一時的ディアスポラの間で

冒頭で触れたヘアレッツ紙の記事は、ナッカーシュを「その人生のほとんどを、かつて13歳のナッカーシュが家族と共に連れてこられたマアバラ、アミシャヴのテントに極めて近い、ペタフ・ティクヴァのアミシャヴ地区で生きた」と表現し、彼の死を「見たところ他の良きシオニストと同じように、死の2週間前にマンチェスターからここ（訳者註：イスラエル）へと戻り、イスラエルの土に埋められた」と表現する⁴⁹。マンチェスターでナッカーシュを雇用していたイラク出身の亡命知識人らは2003年以降イラクへ帰国していった。一緒に来ないかという誘いを、ユダヤ人であるがゆえに被る危険への恐れから断ったナッカーシュは、イギリスにおける経済基盤を失い、失意のうちにイスラエルへ戻りその生涯を終える。結局のところ、彼が帰りたいと願っていた唯一の「ワタン」、かつてのイラクは既に存在しないものであった。

イスラエルのペタフ・ティクバ、かつてナッカーシュがイスラエルでの最初の日々を過ごしたマアバラ、アミシャヴがあった地は、彼が自らの帰り着く場所とは生涯認めたくない場所であっただろう。しかし事実として、戻ることができる安全な「家」を彼に与えたのは、ユダヤ人が生きるにはあまりにも過酷なイラクでもなければ、友人の庇護なきあと経済的困窮が待ち構えるイギリスでもなく、生涯を賭けて逃れ続けたイスラエル国家であり、彼のトラウマ体験の原点であるマアバラの跡地であった。ナッカーシュは、彼が拒み続けた場所へと戻らざるを得なかったのである。さらに皮肉なことに、家族と共にアミシャブへと戻ったナッカーシュは友人に「イスラエルのようにユダヤ人の居住地に適した場所はない」と語ったという⁵⁰。

友人のエズラ・ムラード（עזרא מורד）がナッカーシュの死後7年目、2011年10月に公開した1994年8月9日付のナッカーシュの書簡からは、生前彼がどういった人々によって自らの作品を評価されたいと願っていたのかが垣間見える⁵¹。非ユダヤ系のイラク人、ディアスポラのイラク人詩人、レバノンの詩人などアラブ世界の文人・知識人の名前を挙げる回数が多いということが、印象的である⁵²。このことから、ディアスポラ状態にあるアラビア語を用いる知識人、特にイラク出身の亡命知識人に自らの作品を認識されることが、ナッカーシュにとって一定の意味を持っていたと考えられる。たとえ一時的であれ、イスラエル建国以前のイラクに存在したディアスポラ状態に限りなく近い状況に身を置くため、ナッカーシュは絶

⁴⁹ ליבנה, "סמיר מי?"

⁵⁰ שם.

⁵¹ עזרא מורד. שבע שנים לפטירתו של הסופר סמיר נקאש: שנים ממכתביו שטרם פורסמו 20 באוקטובר 2011. (http://www.parshan.co.il/index2.php?id=8752&lang=:2018 באוגוסט 20)

⁵² *Ibid.* ナッカーシュは、自身の短編小説がディアスポラのイラク人作家・詩人らによる雑誌に掲載されたこと、イラク北部にて自身の書籍がクルド人作家らによって称賛を得たこと、イラク人詩人によるインタビュー記事がロンドンで発行されるアラビア語誌に掲載されたことなどを報告している。

えずイスラエル以外の場所を目指し、イラク出身の亡命知識人との繋がりを保とうとしていたのであろう。

受容されることを望みつつも、そのために安易に志向を変えようとはしなかったという点において、ナッカーシュの国家や言語に対する態度は一貫している。アラビア語で書き続けることを選んだという事実のみに着目すると、それがイスラエル国家に対して作家が取りうる最も有効的な抵抗であったことに異論の余地はない⁵³。しかし、その象徴的な意味の下にある細部を、彼の作品や人生を掘り下げることによって観察してみると、特定のイデオロギーに依拠した一貫性が見られるわけではない、ということもまた明らかである。イスラエル移住後のナッカーシュは「イスラエルのイラク系ユダヤ人」になりきることもできず、またイスラエル建国以前の「ディアスポラのユダヤ系イラク人」に戻ることもできなかった。不必要なまでに込み入った言語で書かれたナッカーシュの作品を読むとき、我々は苦難の始まりである「マアバラ」と一時的かつ疑似的な「ディアスポラ状態」の間を歩き来し生涯を終えた、決して手に入ることのない「ワタン」に魅了され翻弄され続けた作家の姿を見つけるのである。

⁵³ 白杵は「ユダヤ人国家イスラエルのなかでアラビア語をあえて表現手段として選択し続けることは、シオニスト国家イスラエルのユダヤ性を脱神話化する言語戦略としてはきわめて有効なのである」と指摘する。白杵陽『見えざるユダヤ人—イスラエルの〈東洋〉』、平凡社、1998年、150頁。